

以上、展示の古文書より六点を記載したが、毎年展示される古文書を六十の手習いで、月二回学びつつある幼稚な漢文の知識でヨタヨタながら拾い読みできるのが嬉しく、まるで、宝の箱を開けるような喜びで毎年正倉院展に出かける。

今年も出かけたが、出品展示の宝物八十一・点中三十七点が必要しく公開されたものであった。いま一度拝見できたらと念願久しかった弾弓が今度再度公開されて、しかも正倉院展のポスターに写真入りで墨絵の曲芸する人物画が出ていたことは非常に嬉しかった。

(中津市上宮永四)

編集後記

六月下旬に行われた衆・参両院の同時選挙では大方の予想を裏切って保革逆転はならず。自然的には空梅雨のあと、虫の居所でも悪いのか天帝の降雨三昧ぶりが続き、八〇年代に

踏み込んだばかりの今夏は何かが狂っている感じです。古い時代ですと人々は、不凶な予感だなどと語り会ったかも知れません。

記念すべき本誌一〇〇号の刊行直前の大事な時に、本号の編集を命ぜられ、原稿集めが如何にむずかしいことか、そして前号までの編集担当者の御苦労の程が、よく判りました。さて、本号には長友氏の論説以下、七人の方から玉稿をいただきました。

長友氏の論説は、江戸期に国東郡高田町に営まれた商家・佐田屋の商業帳簿類を通して近世在郷商人の実態を究明しようとしたものです。地方史における流通史分野の研究は大きく立ち遅れの現状にあるといわれますが、そうしたプレッシャーの中で本題たる流通形態へのアプローチはとも角として、佐田屋本・支店の創業に係わる研究の面だけでも、今後大きな問題を提起する研究であり、この若い学徒の今後に期待したいと思います。

高橋・末広・小田の三氏からは、それぞれ原史・近現代史研究・呉史編纂事業とで直面している重要課題について玉稿を寄せていただきました。高橋氏の弥生期の、末広氏の近現

代史研究に関する現状と課題とは、ともに齒に衣を着せない卒直な御所見であり、また小田氏には、「大分県史」編纂事業の推進母胎である県史編纂室における地道な作業の様子を、氏自らの体験として語っていただき、この大事業の完成のために、関係者一同の一層の奮起を促がされたまことに貴重な御発言です。

「歴史学は是で稼ぐ学問だ」と申しますが、高木氏と久保氏の御報告はこの鉄則を踏まれた御研究です。佐伯史談会員として高木氏の、佐伯惟治に関する史跡・民俗の研究、また正倉院展参加三十回にも及ぶという久保氏の御報告などは、郷土の歴史を彩った人物や、天平の文化に対する執念にも似た情熱を吐露されたもので、大きい感銘を受けます。

編者らが、数ページの紙幅をいただいで紹介しました史料は、近時発見の新史料です。大野地区におけるこの種の史料はこれまで発見例がなく、初期中川藩政史の研究に、新しい問題を提起するものと思えます。

七月末には発行予定の本号が、編者の不始末から大幅に遅れましたことを会員諸氏におわび申し上げ乍ら、あとがきと致します。

(後藤記)

昭和五十五年八月二十日印刷
昭和五十五年八月三十日発行

大分県地方史 第九十八号

編集人 後藤重巳

発行人 渡辺澄夫

印刷人 中尾芳郎

別府市中央町九一―五

印刷所 日の丸印刷株式会社

電話 ②〇三三一

発行所

大分市且ノ原七〇〇下八七〇―一

大分大学教育学部国史研究室内

大分県地方史研究会

(振替下関五二九四番)